

ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (3 - 2) 片口法の整理・集計・解釈準備段階について

中京大学心理学部

明翫 光宜^{注1}

中京大学心理学部・心理学研究科

八尋華那雄^{注2}

A comparative study on the two scoring systems—Kataguchi's and Exner's—of the Rorschach test (3-2) on the Kataguchi's method for interpretation

Myogan, Mitsunori (School of Psychology, Chukyo University)

Yahiro, Kanao (School of Psychology, Chukyo University)

This article on a comparison between the Kataguchi's Rorschach system and the Exner's one is the third part of a series. This time, the authors tried to compare the ways of summarizing the Rorschach scores for interpretation. The 3-2 reports a translation of the Kataguchi's system to the Exner's system. We expect the clinical psychologists who have been familiar with the Exner's system become more used to the Kataguchi's. There are two important differences between Exner's system and Kataguchi's system.

The first is the interpretation process that psychologists describe the testee's personality from Rorschach protocol. Exner's system is the top-down and successive approach. While, Kataguchi's system is the bottom-up and simultaneous approach.

The second is the viewpoint of Rorschach interpretation. Exner's system pays attention to the psychological function that executes efficient and stable information processing. While, Kataguchi's system pays attention to the psychological function which integrates experiences.

Key words: ロールシャッハ・スコアリングシステムの比較, 片口法, Exner 法

はじめに

筆者らは、ロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストと略す）のスコアリングシステムである片口法（修正 Klopfer 法, 片口-Klopfer 法）と包括システム（Exner 法, 以下 Exner 法と記す）を比較して、その異同を示す作業を行っている（八尋, 明翫 2004）。今回は、整理集計と解釈に到る作業について、両法の特徴をまとめることとする。

日頃、明翫は Exner 法に、八尋は片口法に準拠しているが、本報告では明翫が片口法の整理集計と解釈手続きを、Exner 法を用いている人にも判り易いようにまとめと解説をし、八尋がその逆を行い、相互で検閲を行うという手続きを踏んだ。慣れないシステムを、日頃準拠しているシステムから理解で

きるようにするためである。この作業の結果はかなりの量になるので、3-1 と 3-2 に分けて報告することにする。3-1 で Exner 法を、3-2 で片口法について触れる。

これまでと同様に両法の異同を、片口（1987）、Exner（高橋ら監訳 1991, 中村ら監訳 2002）、藤岡（2004）を基にまとめていく。

1. 片口法の整理と解釈の手順

片口法では、記録用紙は4つの欄に分かれており、一番左の欄にカード番号・反応番号を、その右の欄に反応時間とカードの向きそして自由反応段階での反応語を記入する。更に次の右の欄に質問段階（質疑, Inquiry）での検査者と被検者のやり取りを記録し、一番右の欄にスコアリングをする様式が一番多い。

片口法におけるスコアリングは、Location（反

注1 m-myogan@cnc.chukyo-u.ac.jp

注2 kyahiro@lets.chukyo-u.ac.jp

応領域), Determinant (決定因), Content (反応内容), P-O (平凡反応-独創反応), Form-Level Rating (形態水準評定) の5つの評定が基本である。Exner 法では, これらに加え, DQ・ペア・Zスコア・Special Scores を付ける。片口法では, その他の特徴, 例えば逸脱言語表現などの評価は継列分析に於いて取上げる。また, Fischer と Cleveland の Barrier/Penetration Score, DeVos の感情カテゴリー, 阪大法の文章型など検査者が有効と見做す片口法にない特殊なスコアもスコアリングをしながら付けていく。

プロトコルの整理と言語表現の読み取りは, I カードの第1反応のスコアリングから開始する。I カードのスコアリングが終わったら, 初発反応時間や反応終了時間, 領域, 決定因, 反応内容の特徴, P 反応や P 水準の反応の有無 (Exner 法では FQo の反応となる), 言語表現の特徴などを手掛りに被検者のこのカードに見られる反応特徴とそこから導き出される性格特徴を仮説として列挙し, 記述しておく。同じ手順をIIカード以降も続けて行う。それらの作業を行いながら, 例えばカードによって初発反応時間に違いが生じていないか, 継起は同じパターンが繰り返されていないか (Exner 法では DQ や FQ での継列を見る), 運動が動的吗静的か (Exner 法では active, passive で検討する), 人を見た場合その身体像は全身か部分か, 日頃私たちの周りに見られる人間像か想像上の類人間か, 複数の人間に言及した場合の交流の度合いは深いか浅いか (Exner 法では特殊スコアの COP と AG で検討する), 色彩や濃淡の回避が続いてはいないかなどに注意し, 特徴のある事柄に気付いた時には, それまでのカードで同じような傾向が見られないかを振り返り, 特徴の抽出を行っていく。また, 同じような傾向が見られる時にはそこから先のカードにも同様の事が確認されるか注意する。このような吟味を繰り返し, 明らかにその傾向が確認されたならば, それを被検者の特徴と見做し, その意味 (解釈仮説) を人格特性や病態水準を理解する時に考慮する。この手順は, 形式分析と継列分析を同時並行的に行っているのである。この過程で得られた情報を記述して, 次にスコアを転記した集計表の情報を吟味していく。

これに対し, Exner 法では, スコアリングを集計して構造一覧表を作り, 解釈ストラテジーに沿って, 解釈を進めていく。まずキーワードとなるロールシャッハ変数 (W:D:Dd, DQ, 形態水準や人

間反応や運動反応, MOR, AG, COP などの数値) を検討し, さらにスコアの系列 (Sequence of Scores) で反応の特徴を確認するという手続きをとる。例えば, 形態水準がマイナスの反応の場合を考えてみよう。FQ- は blot の手がかりに合わない意味付けをした際に与えられる。FQ- が生じる背景としては2つのことが考えられる。1つは情報処理に問題がある場合であり, 2つ目は情報処理は適切なのだが, 感情の影響, 思考の構えやとらわれが原因で刺激野の特徴を誤って同定してしまう場合である (Exner 2002 p172)。そこで, 現実志向的な領域の翻訳を困難にしている被検者の内的な働きはどのようなものかを検討する必要がある。このような視点から両システムの特徴を見ると, 片口法はボトムアップ的あるいは同時処理的に解釈仮説を作り上げていくのに対し, Exner 法はトップダウン的あるいは継時処理的に解釈仮説を洗練していくと考えることができる。

スコアの集計は形式分析 (Formal Analysis) のための基礎データとなるが, この作業は, 片口法では反応領域 (Location) とスコアを整理表 (Rorschach Data Sheet K-VIII B) の Location Chart と Scoring List の部分に転記することから始まる。勿論, Exner 法と同様に, 片口法もスコアをコンピュータに打ち込めば各変数の量や比率を即座に集計し作表するソフトも販売されている (高瀬他 RODS Rorschach Data System 金子書房 2004)。

整理表の表紙の部分は, 被検者の氏名・属性・施行日・診断名・主訴や問題・簡単な病歴や被検者の情報・テスト施行時の行動特徴・他検査の結果などを記入する。この点に関しては, Exner 法のロールシャッハ構造記録用紙とほぼ変わらない。

スコアを Scoring List に書き写す際, List には形態水準を表記する欄がないが, 形態水準は主決定因の後に付ける。次に, これを基に, Basic Scoring Table (以下, BST とする) を作成する。BST は, 領域・決定因・内容毎に各変数の量と質を集計したものである。BST が完成すると次に, 形式分析の中心情報源となる Summary Scoring Table (Table 1) を作る。これには, 反応数や反応時間・変数間の比率などの情報も記載されている。Exner 法と対比させると, 構造一覧表の上段が片口法の BST にあたり, 構造一覧表の下段 (RAITOS, PERCENTAGES, AND DERIVA-

Table 1 Summary Scoring Table K-VIII (片口, 1987)

R (total response)		W : D	:	M : FM	:
Rej (Rej/Fail)	(/)	W%	%	F% / $\Sigma F\%$	/
TT (total time)		Dd%	%	F+ % / $\Sigma F\%$	/
RT (Av.)		S%	%	R+ %	%
R ₁ T (Av.)		W : M	:	H%	%
R ₁ T (Av.N.C)		EB	M : ΣC	:	A%
R ₁ T (Av.C.C)			FM+m : Fc+c+C'	:	At%
Most Delayed Card & Time			VIII+IX+X/R	%	P (%) (%)
Most Disliked Card		FC : CF+C	:	Content Range	
		FC+CF+C : Fc+c+C'	:	Determinant Range	
$\Sigma h / \Sigma h$ (wt)	/	W-%	%	修正 BRS	
		Δ %	%		
		RSS			

TIONS) が Summary Scoring Table にあたる。

それでは、以下の Summary Scoring Table を見ながら、片口法の集計を Exner 法と比べてみることにする。

(1) 総反応数と反応の失敗や拒否

Summary Scoring Table の左辺上部に Total Responses と Rejection/Failure の数を記入する。片口法では、各カード 1 つの反応でも拒否によりそれ以下の反応数でも認めるが、Exner 法では、反応の失敗や拒否は受け入れないし、構造一覧表からの解釈の信頼性のためにも 14 以上の反応を求める(八尋・明翫 2004 p29-30 参照)。

一般に反応数は 20~40 の範囲であることが多い。この範囲より多少がある場合は、その理由を動機付けの強さや防衛、情調、知能などの面から推測する必要があり、その際には形態水準やカードによる反応数の推移などが重要な手掛かりとなる。反応の失敗や拒否の理解も、どのカードで起きたか(ショックの有無)、全般的に統覚(情報処理過程、認知的媒介作業と思考)困難がないか、知的あるいは精神疾患が背景にあるのではないかなどを他の変数と関係付けながら仮説を構築して行く。これに対し、Exner 法では施行法の段階で解釈の前提として反応数を 14 個以上求め、かつ反応数が多くなりすぎないように介入することで反応数のある程度統制する。したがって反応数そのものがクラスター分析の変数になっていることはほとんどない。このように反応数と各変数との関連を直接、かつ丁寧に検討す

る片口法のアプローチが Exner 法との違いとなる大きな特徴の一つであろう(Exner 法の場合は、反応の値が各クラスターの構造変数に影響を与えていると考えることが出来る)。

(2) 反応時間

既に述べたように(八尋・明翫 2004 p29-30)、Exner 法では、当初反応時間の計測をしていたが、ロールシャッハ変数との相関がほとんどみられなかったという理由で、次第に反応時間の計測をしなくなった(包括システムによる日本ロールシャッハ学会 2005 p60)。一方、片口法は反応時間を重要な情報と見做している。具体的には「被検者が検査者より図版を受け取って、どれくらいの時間をかけて、最初の反応をするのか」という各カードの初発反応時間とその平均(R₁T (Av.)), 「どれだけの時間をかけて反応を締めくくるか」という各カードの反応終了時間や終了時間の合計(TT (total time))とその平均(RT (Av.))などから被検者の環境への関わり方を推定する。さらに、彩色図版と無彩色図版における反応時間の違い(R₁T (Av.C.C), R₁T (Av.N.C))を検討することによって、Rorschach の概念である「カラーショック」や濃淡反応からの影響に関する情報を得ようとする。また、反応に最も時間のかかったカードとその時間(Most Delayed Card & Time)を記入する。刺激の処理に遅れた理由をそのカードの特性との関係で理解するためである。このように片口法での時間の計測は各ロールシャッハ変数との相関関係のみではなく、

検査場面や図版との関わり方である反応態度の側面をも想定していると考えられる。一方、Exner 法では「情報処理過程は刺激野をスキニングしてその刺激野全体やその一部分の表象（アイコン）を短期記憶の中に創り出す過程である（Exner 2002 p129）」と述べていることから、時間計測も情報処理過程の一要因だと考えられるが、処理のスピードではなく、動機付け・認知的経済性の問題・達成欲求・防衛などの視点からその人なりの情報処理の習慣についての情報を得ようとしている。

(3) 把握型

Summary Scoring Table の真ん中の欄上部は、把握型に関する変数を取り扱う。把握型の細かな分類については、前著（八尋・明旻，2004）で取り上げた。集計値としては、Exner 法と片口法の両法に大きな違いはない。しかし、主に W の規定における違い（八尋・明旻，2004）により、同一被検者のプロトコルであっても、W : D や W % , Dd % が片口法の数値の方が高くなる傾向がある。これは Exner 法が W に対しての規定が厳密であるからである。

S の扱いについても、両法に違いがある。片口法では S のみの反応もある。多くは他の blot との組合せで副領域となる場合が多いが、Exner 法では単独の S 反応はない。S も空白の「部分」と見做される。しかし、頻度の集計では S も 1 個として計算する。Exner 法では、S は片口法の認める反抗癖や対抗的態度だけではなく、怒りと関係するとして、感情に関連する変数として取り扱われる。

片口法では各領域変数の数値だけではなく、それらの質にも注目する。W は「構成的で適切な明細化を伴う W を多く示す人は、連想活動が豊かで、総合力があり、知的活動に持続性を保ちうる人」と解される。しかし、W が過剰であれば、「競争心が強く野心的でありすぎ、対人的な緊張感や欲求水準が過度に高い人柄」が考えられる。また、「W は総合的に見る能力不足あるいは完全癖や自己中心性を反映する」という（p172-173）。Exner 法では、「W・D・Dd かは知覚刺激の入力のスタイルを示すもので、これらの比率から入力の際の動機付けの高さを見ようとするものである」（藤岡 p41）。つまり、どの領域の数値が高くなっているかという比率のバランスにより、情報処理努力のやり方とそのエネルギーの経済性を理解しようとする。さらに

情報処理の効率や安定性に関しては形態水準で評価する。W が優位の場合は、刺激全体を処理しようとすることから、情報処理により多くの努力を示していると考えられている。

D は、片口法では「総合的・抽象的なものの見方には関心を示さず、むしろ、物事を現実的に具体的に処理していく能力が高いと考えられる（p173）」としている。一方、Exner 法では、D 領域という明白な部分を知覚して意味付けていることから、心理的エネルギーの経済性を示す（高橋ら，1998）。

片口法では、Dd は特殊部分反応の総称で、下位分類に dd（微小部分反応）・de（外縁反応）・di（内部反応）・dr（特殊区分反応）がある。Exner 法では、片口法の大部分の D と使用頻度の高い d は D、一部の D と d は No. を付した Dd として処理され、片口法における Dd（dd, di, de, dr）は概ね Dd99 として、また S と合体した D 領域は DdS とコード化される。これらの Dd や DdS の FQ は u あるいは - であることが多い。片口法では、d や dd は些細なことに拘泥する傾向やあいまいさを排除し、確かさを追及することで不安を克服しようとする態度を表すとされる。de は、問題の核心に触れることを避け、内気で臆病な生活態度を反映すると言われる。di は、敏感で不安を抱き易い人によく見られ、知的で芸術的な感性を持つ人柄を反映するとも言われる。dr は、独創性に富むが、知的で批判的であったり、強迫的な完全癖の特徴でもある。Exner 法で Dd とされる領域は、blot の大きさには関係がなく被検者が概念の形態イメージを正確にカードの blot 上に当てはめ不要な部分を除くことで生じ、他の多くの被検者は注意を向けない領域である。Dd は被検者が blot をかなりスキニングした後に用いられることからより多くの情報処理努力がなされたことを示すとされる。Dd の解釈については、片口法の方がより細分化されているといえる。

(4) 決定因

決定因でも把握型と同様に、同一被検者のプロトコルにおいて集計値に差が出てくる。片口法は主決定因を選択すると、残りは副決定因として扱い、各々に 0.5 点の重み付けをするのに対し、Exner 法は複数の決定因が見られた場合は、ブレンドという概念で扱い、各々を 1 決定因として平等にカウントする。これらの違いが、重要な体験型（M : SumC）を検討する際に、Exner 法より片口法の数値の方が低

くなる傾向がある。

FM+m : Fc+c+C' は潜在的体験型と呼ばれるもので、M : ΣC の数値、あるいは比率との一致・不一致をみる。この変数の比率は、Exner 法では基礎体験 (eb) とほぼ一致する。集計の仕方は同じでも数値の考え方において、両者に特徴的な違いがある。片口法では、FM+m : Fc+c+C' は、潜在的体験型と呼ばれるように被験者によって完全に認知されていない体験型を示す。したがって解釈では体験型の方向性と潜在的体験型の方向性と同じであるかどうか比較する。一方、Exner 法はそれとは別の意味合いとして取り扱う。左辺である FM+m は、「意識的コントロールに抗して侵入する観念化 (Weiner 1988 p155)」を示す変数で思考のクラスターを構成する一要因として検討する。また右辺である Fc+c+C' (Sum Shading) は、感情のクラスターで検討し、FM+m < Fc+c+C' の場合は被検者に情動的ストレスが存在し、適応的でない不快な感情を示すとされる (Weiner 1988 p162-163)。Exner 法のルーツが Beck 法にあり、片口法のルーツが Klopfer 法にあることから生じる違いであると思われるが、同じ変数でありながら両システムにおいて変数の心理学的意味がそれぞれ異なるのは興味深い。

片口法の Summary Scoring Table を見て、Exner 法と比べて特徴的なのは、現実体験 (EA = M + ΣC) や刺激体験 (es = FM+m + Fc (FT) + cF (TF) + c (T) + C' (+SumY+SumV)) や D スコア (D = EA - es) を算出していないことである。この点に関して、片口法は Determinant Range や M : FM, Psychogram でこれらのバランスを検討していく。両法のこの点の考え方の違いは、Exner 法では体験型の数値を現実体験という被検者の心理的資源の能力として重視しており、片口法では体験の幅の広さやバランスを重視していると考えられるからであり、この点も Beck 法と Klopfer 法の考え方の違いが反映されていると思われる。

その他、VIII + IX + X / R は Exner 法では Afr に、FC + CF + C : Fc+c+C' は、感情的萎縮の割合を示す SumC' : SumC に、F% / $\Sigma F\%$ はラムダ (L) の値にほぼ該当する。

(5) 形態水準

形態水準では、両法に大きな違いが見られる。まず片口法では、R+% (全ての反応で形態水準が良

形態であるものの割合) と F+% / $\Sigma F\%$ (F 反応で形態水準が良形態のものと形態確定的概念を用いた反応で良形態が占める割合) など全カードの形態水準だけではなく、決定因と形態水準との関連に焦点を当てているのに対し、Exner 法では、X+% (良形態反応)、Xu% (稀少な形態の使用)、X-% (歪んだ形態) など反応の形態水準別の割合を算出する他に、XA% (全体適切形態反応)、WDA% (一般的な領域における適切形態反応) といった領域と形態水準との関連に焦点が当てられている。片口法においても、W・D・Dd の形態質を注意するし、Friedman の形態質の分類を紹介して (片口 p169-171) はいるが、スコアリングのシステムに組み込まれてはいない。

このように片口法と Exner 法の形態水準の集計には違いが見られるが、解釈的にはどのような違いがあるのだろうか。片口法では決定因、すなわち色彩 (無彩色や濃淡を含める) や形態、自己の内面 (運動感覚) といった複数の異なる性質のものの統合をいかに成功させるかという考え方が背景にあると思われる。一方 Exner 法では領域との関連に焦点を当て、被検者の情報処理の効率 (領域) と質 (形態水準) がいかに有効になされているかを考えているように思われる。Exner 法はより情報処理の質に重点を、片口法では統合力の質に重点を置いていると考えることが出来る。

(6) 反応内容

反応内容では、片口法では H%, A%, At% と Content Range を算出する。A% の高さは Content Range と関連して検討され、生活空間の広さや関心領域の幅を推測する。Exner 法では、自己知覚と対人知覚のクラスターに反応内容が指標として採用され、H, (H), Hd, (Hd), An+Xy, Fd, 孤立指標 (Cl, Na, Bt, Ge, Ls), 特殊指標の COP, MOR, AG, PER をも併せて、人が自分をどのように把握しているか、自分にどの程度の関心を向けているか、他者をどのように理解し、さまざまな対人場面でどのように行動するのかといった対人関係の側面の特徴を検討する。片口法では、RHI (同性愛指標) の検討にも反応内容が大きな手掛かりとされるが、言語表現も加味して自己像や他者知覚を検討していく。

2. 片口法の解釈

先の片口法の整理と解釈の手順の項でも少し触れたが、実際に受検態度やスコアの量的比率、反応内容や言語表現を読み進めていきながら、そのときに考えられる人格特性や病態水準に関するいくつかの仮説を設定し、それらを統合して総合解釈を試みるのが片口法の解釈の実際である。

<受検態度>

片口法の解釈は反応数・反応時間から注目して進めていく。これらの因子は、検査に対する動機付け、社会的要請（課題）への対応、防衛、注意の持続、刺激の処理の速さ、創造性・想像性・生産性が反映されるからである。形態水準や受検態度を文脈に入れて、解釈をしていく。

R：反応数 反応数の大小を左右する背景には、検査に対する動機付けや検査者に対する感情（敵意）、課題を遂行するのに必要な知的能力、被検者の情調（抑うつ）、外界に対する関わり方（防衛的）、個人の特質（野心的など）が関与している可能性がある。

Rej：反応拒否 統覚の失敗（Failure）なのか拒否（Rejection）なのかの判断は難しいが、そのニュアンスを観察を通して把握することが解釈につながる。その他には、色彩や濃淡によるショックで反応拒否が起こることもある。Exner 法では、失敗や拒否は認められず、反応想起への働きかけが行われる。

R₁T（A_v）：初発反応時間 カードによる難易度もあるが、概ね 10～20 秒の間が平均。着想が早い場合は形態水準の良否に注目する必要がある。一般に R₁T が早い被検者は幼児や軽躁者に多いとされている。また時には不安に基づく強迫性を示したり、検査に非協力的である場合もある（高橋・北村, 1981）。R₁T が遅い時は「心的機能の低下、防衛的・警戒的な態度、情緒的抑制

やうつ状態などを考慮する必要がある（片口 1987 p164）。」

RT：反応終了時間 検査に興味を持ち、協力的であるか防衛的・拒否的かなどの受検態度によって左右される。反応数も考慮して検討する。

図版の回転 「なるべく両手に持って自由に見てください」という教示をどう理解し、与えられた自由度をどう行使するか、受動的か能動的かに関係している。

これらの着眼点のうち、図版の回転や図版の取り扱いについては、Weiner（1988）がテスト行動の解釈として詳しく取り上げている（p256-265）。

反応数、反応拒否、反応時間から対人的側面、思考過程、感情面、さらに病態水準まで多領域の解釈仮説を設定する考え方は Exner 法とは異なる片口法のユニークな点であろう。

<把握型>

次に把握型がどのようなものかへと読み進める。形態水準や形態確定性の程度を考慮しながら進めていく。

W, D, Dd, S 各々の量 「反応領域のカテゴリーは、被検者が外界をどのような仕方方で把握するか、与えられた課題をどう処理するか、即ち総合的か分析的か、演繹的か帰納的か、抽象的か具体的かなどの知的様式を反映する。また、完全癱の有無、成熟度、知的水準などの人格特性を知ること可能である。（片口 1987 p167）」

Wの数 統合の失敗か自分のイメージに合わせるために blot の一部を切り離した場合にスコアされる。厳密には被検者自身が不用であると言及しなければならない。Exner 法にはこのカテゴリーはない（Exner 法では Dd に反映され、さらに Dd の解釈仮説の 1 つに強迫性がある）。総合的に見ようとしても相応する能力に欠ける、あるいは完全癱や自己中心性を反映すると解される。

Dd の領域を使っているか dd, de, di, dr の使用頻度。社会的・常識的思考の枠に捉われない自由で活発な精神活動に由来すると考えられている (Exner 法では①強迫傾向, ②警戒的で曖昧さに巻き込まれるのを最小限にしようとしている, ③S を過度に使用する否定的で反抗的な構えの3つの場合が考えられる)。

W-や DW はあるか W-は W の形態水準が-の反応 (不良形態全体反応) である。片口は $W-\% = (Wa+W-+DW)/\Sigma W \times 100$ として W の不良形態反応の量を見る。DW は blot のごく一部の形態特徴のみを手掛かりに全体を用いて意味づけた反応であり、内閉論理などの病的思考を反映している (3-1 で述べたが、Exner 法では 1986 年の時点では Confabulation として DW を特殊スコアに採用していたが、後に削除された。現在では DW は FQ- として処理される)。

S の数はどうか 片口はいくつかの研究者の解釈仮説を紹介しているが、どの仮説を取るか明記していない。しかし、なんらかの反対傾向に関係しているという見解であるようだ (片口 1987 p174)。

Exner 法と片口法の把握型を比較すると、Exner 法は一貫して、把握型の数値を情報処理の経済性や効率という文脈で扱い、さらに領域継列 (どの図版で W 反応が生じているか? 情報処理の努力とアプローチの一貫性はどの程度あるか?) という手続きで解釈仮説を立てていく。被検者が日常生活でどのような情報処理を一貫してとるのかを検討している。それに対して、片口法は W 反応を W, W, DW の下位分類スコアで、Dd 反応を dd, di, de, dr の下位分類スコアでさらに分類し、さらに形態水準との関連を念頭において被検者の情報処理の構えおよび現実吟味のより細かなニュアンスを汲み取ろうとするところに大きな違いがあるといえよう。

<体験型>

次に手がかりになるのは体験型である。ここでは Psychogram が参考になる。Psychogram とは、大まかに左から「運動」「形態」「色彩」の分布を視覚的に示したものである。左半分に偏る型は、blot にはない運動や興行きなどを見ている意味で、想像力の豊かな人と言えるが、外的現実を自己流に再構成する傾向が強い。右半分に偏る型は、濃淡や色彩という実際にカードにある属性を決定因として用いている。外的現実を受け入れ、それに自分を適合させる傾向がある。中央に集中する型は、圧縮的・抑圧的統制の強い人で、現実に対する自由で柔軟な態度に欠ける傾向がある。適度に分散する型の人には、内的な資質も外的な感受性も豊かな人柄と見てよい。片口法では、この型をそれぞれ、内向的体験型、外拓的体験型、両貧の体験型、両向的体験型と分類し、体験型を4つに分類する。

M: ΣC 内的な精神活動を示す内向的要素と外界への関心を示す外拓的要素の相互関係から知能・想像力・内的安定性・共感性といった特性と情緒的刺激に対する感受性とその対処のあり方を見ることができる。

FM+m: $Fc+c+C'$ 潜在的体験型。M: ΣC を補う指標。FM+m は被検者に認知されていない内向的傾向を示す。同様に $Fc+c+C'$ も認知されていない外拓的傾向を示す (Exner 法にはない考え方である)。

VIII・IX・X/R% 環境からの情緒的刺激に対する感受性を反映する。25%以下では情緒的刺激に反応することに消極的・回避的な傾向を、40%を超える時は刺激に対し行動的あるいは活発な観念活動を示すことを表す (Exner 法でいう Afr に相当する)。

体験型での両システムの比較で、最も異なる部分が両向型の心理学的意味であろう。片口法では両向型を肯定的な意味で捉えるのに対し、Exner 法では両向型を不定型として消極的な意味で捉える。さらに既に述べたが潜在的体験型の数値をどのように捉えるかという点も片口法と Exner 法では大きく異なっている。この点で検査所見のニュアンスが大きく異なってくる。片口法は統合性を、Exner 法

は情報処理や環境の関わり方の効率性や安定性を査定することからくる違いであろう。

<反応内容>

反応内容は、被検者の観念内容の豊かさの度合い、常識性・独創性、対人知覚や関係のあり方、自己像や父母像などを見ることができる。各カードの反応内容の集計やあるカードに期待される反応の有無ばかりでなく、情緒的表現、カードとの体験的・認知的距離の判定なども併せて行う。

P 反応 一般的常識的判断が可能かどうか
が知れる。P 反応と規定される反
応以外にも高頻度で見られる P
水準の反応内容にも精通しておく
必要がある（松枝ら 1989）。

O 反応 Exner 法では FQo の反応である。
頻度の稀有な反応で、独創性を示
唆するが、常に形態水準に注目す
る必要がある。良形態の O 反応
は Exner 法では FQu に、不良形
態の O 反応は FQ- となろう。

CR 関心の幅や生活空間の広さ・狭さ
を示唆する（Exner 法にない考
え方である）。

H% $H + Hd + (H) + (Hd) / R \times 100$
対人的関心の指標。Pure H の欠
如は対人関係の忌避や社会性の喪
失を意味する（Exner 法では H
%はないが人間反応 human cont
= $H + Hd + (H) + (Hd)$ は算出す
る）。

H + A : Hd + Ad 後者が 1 < 2 以上だと、外的事
象の把握統合力の低下が伺われる
（Exner 法では自己知覚・対人知
覚から検討する）。

A% 動物反応は容易に見られ易く、A
%の平均は 25~60%の範囲内に
ある。A%は紋切り型思考の指標
でもあり、不安や抑うつによって
観念内容が貧困になると A%は
増大する（Exner 法では解釈に
採用されていない）。

At 心気症など身体に関心が向き過ぎ
ている状態や不安の反映と解され
る（Exner 法では An + Xy とし

Sex

て自己知覚のクラスターで検討す
る。さらに、Weiner (1988) は
内容分析で At を検討している）。
性的関心の強さと言うよりは、常
識的・社会的枠組みからの逸脱と
捉えられる（Exner 法では解釈
に採用されていない。しかし、
Weiner (1988) は内容分析に
Sex 反応を検討している）。

反応内容の検討を比較すると、片口法には人間反
応に加えて動物反応も形式分析の対象になっている
のに対し、Exner 法では人間反応のみであること
に違いがある。また Exner 法には Content Range
という考え方も採用されていない。Exner 法は自
己知覚と他者知覚というクラスターで、人間反応と
それに伴う分化・限定・修飾により重きを置いてい
るのに対し、片口法はさらに観念内容の広さも検討
している点が違いであると思われる。

ここまで見てくると、片口法はスコアリングの観
点（受検態度、把握型、決定因、反応内容）に沿っ
てロールシャッハ変数の示す意味や解釈仮説を複数
設定し、数値を読み進め、それらを確定しながら被
検者のパーソナリティ像の仮説を構築してゆく考え
方であることがわかる。

<継列分析>

片口 (1987) は、「継列分析は、記号による客観
的・数量的な解釈にとどまらず、10 枚の図版に対
して与えられる反応を、時間的な流れのうちに、各
図版の特性を考慮しつつ、力動的解釈を試みる方法
といえる (p230)」と述べ、さらに「実際の臨床場
面に直接役立てうる継列分析の解釈は、客観性を多
少犠牲にしても共感的・直観的・了解的な観点に重
点を置かざるを得ないであろう (p231)」と述べて
いる。

片口法に準拠した継列分析を行うには、各カード
における反応時間の特徴、blot の特徴と頻度高く
用いられる領域、多い内容、それらの内容に用いら
れ易い決定因などを知っておくことが大事である。
被検者の反応の速度、反応内容、明細化に見られる
決定因や言語表現が一般的なものか特徴のあるもの
か、特徴があるとすればそれはどのようなものかが
検討できる。

Exner 法の継列分析は、クラスター分析の中で
その都度行っていると考えられる。例えば、W : D :

Dd の数値を検討した後に領域継列, DQ の分布を検討した後に DQ の継列, 形態水準の数値を検討した後に形態水準の同質性, M の形態質, 人間反応に投射された内容の吟味などクラスター分析で対象となった変数が吟味される度に継列分析が行われる。Exner の解釈法とは別に Weiner (1988) は, 被検者の対処能力や対処様式を査定するために, 被検者の関心事 (被検者の特別な興味や苦痛のもとになるもの)・防衛 (被検者が不快な出来事によって生じる感情などを少なくしたり, 逃れようとする方法)・回復 (被検者が状況ストレスや刺激図版によって生じた混乱をいかにして克服するか, さらにいかにして有効な機能にまで立て直すか) という 3 つの側面から継列分析をすることを勧めている。

<サインアプローチ>

反応内容までで, 大まかな人格傾向や病的特徴を捉えられる。さらにはサインアプローチといわれる特徴的なスコアの組合せにより, 様々な臨床尺度が工夫されている。代表的なサインとしては, 修正 BRS (Basic Rorschach score), RSS (Rorschach schizophrenia score), RHI (Rorschach homosexual index) などがあげられる。解釈を行う上で手がかりとなるが, 使い方を誤りサインに当てはまるかどうかといったことに終始してはならない。

上述した個々のスコアやスコアの量的比較を基に総合的解釈を行う。片口は「各記号の意味を考慮し, さらに, それら相互間の関係, 比率, 均衡に注目しつつ, 力動的に解釈を行う必要がある。—中略—実際には, われわれが経験的に有効と考えるいくつかの組合せを, 重点的に取り上げるほかはなからう (p219)」と述べて, 知的側面と情緒的側面の検討方法について言及している。

<知的側面の評価>

片口法では, 知能に関連を持つと考える因子は, 形態質, M 反応の量と質, W 反応の量と質, O 反応の量と質, 内容の多様性などである。

形態質に関しては, R+%, F+%, ΣF +%などが指標となろう。これらは, 現実吟味力, 判断の適切さを伺い知らせるもので, 知能の評価において最も有力な手掛りとなる。 ΣF は M や FM を含む一次形態反応を指し, 概念は殆どが形態確定的である。それらの反応の形態水準が+と±のものの全体で占める割合が ΣF +%である。これは Exner 法

においては, 概ね {DQ+あるいは DQo} でかつ {FQ+あるいは FQo} である反応の占める割合 (X+%) に相当する。しかし, 「M 反応の示す想像力や共感性は, やはり優れた知的素質を必要とする (p225)」。「構成度の高い, 明細化が行き届いた良形態水準の W が多い時, 高い知能を推定することが可能となる (p 同)」と片口が示すように M と W は適切な量もさることながら M+%, W+%にも注目する必要がある。その他に O+は優れた豊かな知的素質の存在を意味している。知的に優れた人は, 変化に富んだ反応内容を出せるので A%もひどく高くなることがない。この他にも, DR (Determinant Range) の多さ, R₁T (A_v), TR, 言語表現なども知的側面に関連のある因子である。また, W:M で「W を強調する人は, 自分の知的能力以上のことを試みようとして, 野心的である」といわれるように達成欲求も知的側面の評価として重要である。

片口法の知的側面の評価は, Exner 法でいう情報処理, 認知媒介, 思考の 3 つのクラスターをまとめたものであると思われる。

<情緒的側面の評価>

ロ・テストでは, 情緒の統制と情緒の内容や性質を取り上げることができる。

情緒の統制の様式には, 内的統制, 外的統制, 圧縮的・抑圧的統制の三つに分けられる。

内的統制は M:FM の比でみる。片口は, 「内的統御とは, 外面行動を調節するのに十分なだけ行為を統御し, 情緒刺激への適切な対処を可能にする内的な資質である。」と説明している。この変数は, M が表す内的安定すなわち, 統制し得ない衝動性を回避する能力と, FM すなわち直接的満足を得ようとする衝動との対比を意味している。衝動とそれを抑える自我との関係と言ってもよい。この指標の解釈的意味は M が少なくとも 3 つ以上必要であるが, 比率によって以下のような解釈仮説が意味付けられる (本明ら, 1956)。

- (1) FM>2M の場合, 長期的な目標よりも直接的なすぐに満たされる欲求に支配されやすい。
- (2) M>FM の場合, 衝動生活はその人の価値体系によって制圧されている。
- (3) M=FM の場合, 価値体系と衝動性のバランスのとれた, 成熟した自発性を有する人であると推測する。

(4) $M < FM < 2M$ の場合、あまり望ましくはないが正常範囲にあり、 M と FM のどちらに近いことによって被験者の衝動と自我の関係の傾向が判断される。

(5) M , FM とともに僅少の場合、まず形態水準を参考にする。プロトコル全体の形態水準が低ければ自我の弱さを示し、形態水準が高ければむしろ衝動そのものが押し殺されている神経症的圧縮 (neurotic constriction) を示すものと考ええる (圧縮的・抑圧的統制の項を参照)。

外的統制は $FC : CF + C$ の比でみる。外的統制とは、外面の行動や表現を統御することをいう。色彩が情緒を喚起する刺激であるとするならば、知覚における色と形の優位性の発達の変遷研究から、 FC 優位が情緒的統制、欲求不満に対する耐性が高く、現実の様々な事態に刺激された感情を適切に把握し、対処し得ることを意味している。 CF はやや統制に欠けるが、適切で素朴な情緒性を示すとされる。 C は統制を欠いた衝動的・爆発的情緒の存在と表出を示唆する。この比は $2 : 1$ が望ましいとされるが、それよりも $CF + C = 0$ でないことが望まれるのは、 CF に反映される生き生きとした感情があることが自然であるからである。Exner 法では、 $FC : CF + C$ の解釈仮説については、被検者の体験型 (EB) の数値と関連させてより細分化している。

圧縮的・抑圧的統制は「内的な想像活動も、外的な刺激に対する反応性もともに抑え、自我を制限して現実に適応しようとする統御である」。Psychogram の左辺と右辺が抑えられると反応決定因は極端な F 優位となり、Exner 法における High L (ハイ・ラムダ) となる。 $F\%$ が 60 を超えると圧縮的統制が優位と見て良い。片口法の情緒的側面の評価は、Exner 法でいう感情面のクラスターにほぼ該当する。

<対人的側面>

片口の一般的記号の総合的解釈の項 (p219-228) にはないが、ロ・テストからは被検者の対人的側面を考察することができる。当然、 $H\%$ は対人的関心の指標となるが、Pure H と他の H_d , (H), (H_d) の比較が必要である。後者の3カテゴリーは他人に対する関心や感受性を反映するが、現実の対人関係では他者に脅威を感じていたりするために回避的であったり、距離を置こうとしていると考えられる。また、対人的評価には、見られた人が一人なのか、

対称となる二人の人の交流の度合いはどの程度か、友好的な関係か敵対的なものかといった関係の質を吟味することが大事となる。また、人間反応でなくとも、例えば対称にみられる動物の関係にも注意を払う必要がある。更には、威嚇的な人物像や弱々しい人物像は被検者の周囲の特定の人物を投影している可能性もあるし、自己像と結びつく反応内容や表現にも注意を注ぐ必要がある。

片口法の対人的側面は、Exner 法でいう自己知覚、対人知覚のクラスターをまとめたものであると思われる。

おわりに

片口法の整理・集計・解釈準備段階を Exner 法と比較しながら述べてきた。これらの段階で Exner 法と片口法との大きな違いを述べるとすれば、以下の2点に集約される。

1 つ目に、被検者のパーソナリティ像の解釈仮説に至るプロセスである。Exner 法は構造一覧表の解釈ストラテジーを元に解釈を進めていき、数値に特徴が見られた場合などではさらにスコアの継列を検討する作業に入る。いわば、Exner 法はトップダウン的あるいは継時处理的に解釈仮説を洗練していく方法であった。それに対して片口法では、受検態度、把握型、決定因、反応内容に沿ってロールシャハ変数の示す意味や解釈仮説を複数設定し、数値を読み進めるに従い被検者の本質的なパーソナリティ像の仮説が出来上がっていくボトムアップ的あるいは同時处理的に解釈仮説を作り上げていく方法であることがわかった。さらに片口法と Exner 法を学んだ筆者らの経験からすると、片口法は基本的なスコアに加えて逸脱言語表現や感情カテゴリーなどを援用してより細かなニュアンスを汲み取る必要があること、対人的側面・思考過程・感情面・さらに病態水準まで多領域の解釈仮説を設定し、分析を進めながら本質的なパーソナリティ像に迫るので、高度な柔軟性と経験を検査者に求める方法であるといえるのではないだろうか。

二つ目は、両システムの着眼点の違いである。片口法は体験を統合性する力を、Exner 法は情報処理や環境の関わり方の効率性や安定性に重きを置いていると思われる。これらの着眼点の違いは、Exner と片口のロールシャハ観、および人間観の違いを示しているのであろう。

両システムの整理・集計・解釈準備段階を検討することで、それぞれが人間のどの側面に焦点を当てているか理解することができたと思う。続報として事例研究で再び両システムの共通点と相違点について考察する予定である。

引用文献

- Exner, J. E. Jr. 1986 The Rorschach: A Comprehensive System Vol. 1: Basic Foundation
現代ロールシャッハ・テスト体系 (上・下) 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳 金剛出版 1991
- Exner, J. E. Jr. 2000 A Primer For Rorschach Interpretation
ロールシャッハの解釈 中村紀子・野田昌道監訳 金剛出版 2002
- 藤岡淳子 2004 包括システムによるロールシャッハ臨床 誠信書房
- 包括システムによる日本ロールシャッハ学会 ロールシャッハとエクスナー ロールシャッハ・テストの起源と発展 2005 p60
- 片口安史 1987 改訂 新・心理診断法 金子書房
- 松枝加奈ほか 1989 平凡反応の時代的・文化的変化 ロールシャッハ研究 31 p23-43
- 名古屋ロールシャッハ研究会 1999 ロールシャッハ法解説—名古屋大学式技法— p34-43
- 本明寛・滝沢清子・富田正利・湯本泰道 1958 臨床の実施法と分析法 ロールシャッハ・テスト (2) 〈心理診断法双書 全3巻〉中山書店 p42-141
- 高橋雅春・北村依子 1981 ロールシャッハ診断法 I サイエンス社
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 1998 包括システムによるロールシャッハ解釈入門 金剛出版
- Weiner, I, B 1998 Principles of Rorschach Interpretation, Lawrence Erlbaum Assoc Inc. 秋谷たつ子・秋本倫子訳 ロールシャッハ解釈の諸原則 みすず書房 2005
- 八尋華那雄・明翫光宜 2004 ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較(1) 施行法と反応領域・発達水準などの記号化について 中京大学心理学研究科・心理学部紀要第4巻第1号 p27-34
- 八尋華那雄・明翫光宜 2004 ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較(2) 反応領域・形態水準評定・反応内容・平凡反応について 中京大学心理学研究科・心理学部紀要第4巻第1号 p35-44

(受理年月日 2006 年 1 月 20 日)